

股関節に痛みや動きの制限「変形性股関節症」 治療は症状の程度に応じ選択

九州大病院別府病院の治療・研究

からだを 読み解く

▶ 4 ◀



整形外科助教
原大介

股関節は太ももの骨(大腿骨)と骨盤をつなぐ重要な関節で、歩行や立ち座りなどの日常動作に不可欠です。正常な状態では、大腿骨の丸い骨頭が骨盤側のくぼみ(寛骨臼)にはまり、滑らかに動きます。

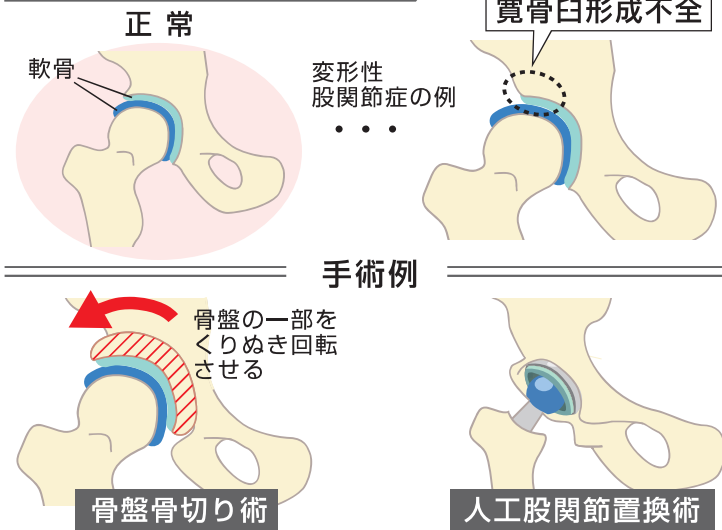
変形性股関節症は、この関節の軟骨がすり減り、骨同士が直接こすれ合うことで痛みや動きの制限が生じる疾患です。主な原因には加齢、体重増加、過去の外傷のほか、日本人に多い寛骨臼形成不全があります。この形成不全では骨盤側のくぼみが十分に深くないため、長年にわたり関節に過剰な負担がかかります。典型的な症状は股関節の痛みで、足の付け根から太ももの前面や外側、時には膝にまで及ぶことがあります。

初期には長時間の歩行後や階段の昇降時に痛みを感じ、休むと和らぐことが多いです。進行すると、靴下をはく、浴槽の縁を越える、正座するといった動作も困難になり、足を広げる動作も制限されます。

痛みによる活動制限は筋力低下を招き、さらに関節への負担を増す悪循環を生み出します。また、痛みを回避するために腰や膝などの他の部位を使いすぎることで2次的な問題が発生することもあります。治療は症状の程度に応じて選択します。初期段階では、体重管理、筋力強化を中心とした運動療法、必要に応じてつえなどの使用、

消炎鎮痛薬の服用などの保存的治療で効果が不十分な場合や、関節の変形が進行した場合には手術を検討します。軟骨が残っていない関節の変形が少ない40代までの患者さんには「関節温存手術」が選択肢となります。関節温存手術で一番多く行われている「骨盤骨切り術」は、浅くなっている骨盤側の屋根をくりぬいて回転させ、体重が均等にかかるよう調整する術式です。一方、関節の損傷が高度な場合には、痛みの原因となっている関節を人工物に置き換える「人工股関節置換術」が効果的です。近年は手術技術や人工関節の素材の進歩により、長期耐久性も向上しています。

変形性股関節症の手術



初期段階は運動療法など

股関節に違和感や痛みを感じたら、我慢せず早めに専門医を受診しましょう。特に関節温存手術は手術ができるタイミングが限られているため、「旬」を逃さないことが大切です。早期発見と適切な治療により、症状の進行を抑え、快適な生活を取り戻すことができます。